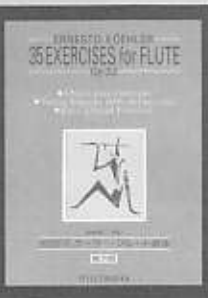


教本・エチュードを正しく使ってステップアップしよう!

「E.ケーラー：エチュード Op.33」

岡村考二

E.ケーラーのエチュードOp.33は全3巻からなり、メロディの美しさの中に、演奏テクニックを身につけるのに必要な技術を要求しております。このエチュードを丁寧に練習していけば、必ず高度の演奏技術が身につくはずですよ。



1974年3月国立音楽大学器楽科卒業。1976年ロサンゼルス日系交響楽団国際音楽コンクール入選。NHK・FM「夕べのリサイタル」「午後のリサイタル」「フレッシュコンサート」等に数多く出演、放送される。東京バロックアンサンブル代表を務め、独奏、室内楽奏者として活躍している。三井住友海上文化財団主催「地域住民のためのコンサート」では全国各地で好評を得ている。フルートレッスン小曲集、フルート名曲ライブラリー等、数多くの出版物がある。文京学院大学講師。

アクセント (>) と スタッカート (・) 記号について

演奏するにあたってはアクセントとスタッカート記号には特に注意を払わなければなりません。

アクセントの表す意味には3つの意味があります。

- 1) sforzando…スフォルツァンド その音を特に強く。
- 2) tenuto…テヌート 音を保持して、その音の表わす長さを十分に保って演奏する。
- 3) agogik…アゴーギク 楽想に依る微妙な速度変化と間のとり方。スタッカートの表す意味にも3つの意味があります。
 - 1) staccato…スタッカート 一つずつの音を短く切って演奏する。
 - 2) tenuto…staccatoとtenutoは相反する意味ですが、バロック時代の記譜には多く見られます。
 - 3) agogik

E.ケーラーのエチュードOp.33では、テヌート(ー)の記譜がありません。このことから、曲の持つ意味をよく考え、アクセントは「その音を強く」、スタッカートは「その音を短く」といった固定観念を取り払って演奏する必要があります。例を挙げると、1巻2番の2、4小節目のアクセントは、はっきりと演奏して欲しいために注意を促す意味でついています。5、6、7小節目のアクセントはテヌートの意味と考えてよいでしょう。8小節目のアクセントはまさにagogikの意味を持っていると思います(譜例①)。



曲想表示について

曲の中に出てくるイタリア語の表現にもよく注意してください。例をあげると、Allegro、Allegrettoは単に速度を表わしているのではなく、非常に広い意味を含んでいることに注意してください。Allegroは「速く」だけではなく、活発で明るく、快活であること、Allegrettoは「やや速く」だけではなく、Allegroよりも優美に演奏する等の意味も持っています。したがって1巻1番の曲の始めに書いてあるAllegro moderatoは「活発で明るく中ぐらいの速さで」と理解できるとと思います。このように言葉の表現のニュアンスは一つではなくたくさんあるので、作曲者の意図していることを把握するためにも必ず辞書をひいて調べてください。

アーティキュレーションの持つ意味

アーティキュレーションも演奏表現に大きな意味を持っています。単旋律で演奏するフルートでは、メロディと伴奏の和声法(垂直の音関係)と2つ以上の旋律の組み合わせによる対位法(水平の音関係)がアーティキュレーションにより効果的に表現されており、これらのアーティキュレーションをよく分析して、作曲家の意図しているところ、演奏家の表現したいことをイメージし、演奏表現に役立ててください。

装飾音について

E.ケーラーのエチュードの中にtr、~、wなどの装飾音が出てきます。曲の持つ意味を考え、どのように表現するかによって入れ方が変わってきます。装飾音を入れるにあたっては、まず装飾音を取ってリズム通り正しく演奏できるようにしてからにしてください。例えば、2巻10番の~は譜例②のように演奏するとよいでしょう。

2巻10番1~3小節



練習は丁寧に根気よく!

練習をするにあたっては、メトロノームを使用し、ゆっくりと一つ一つの音を大切に確実に進んでいってください。あらゆる角度から曲のアナリゼを行い、曲のイメージを作ってから演奏しましょう。イメージトレーニングは大変重要なことです。

最後になりましたが、E.ケーラーのエチュードOp.33はアルテス2巻を終了程度のレベルが対象となります。基礎をしっかりと作ってから始めましょう。2巻から3巻へは少しステップアップが大きいので2巻終了後、アンデルセンのエチュードOp.21、ペーームのエチュードOp.26などを勉強されるとよいでしょう。